

資料

日本で学ぶ視覚障害留学生の日常生活における困難について

Yuldasheva Nozima*・小林 秀之**

視覚障害留学生が日常生活を送る上で感じる困難を明らかにすることを目的とし、視覚障害留学生10名及び晴眼留学生10名に日常生活を送る上で感じている困難について半構造化面接を行った。視覚障害留学生から155件、晴眼留学生から58件の困難が抽出された。留学生の困難は6件の大カテゴリ、14件の小カテゴリに整理できた。視覚障害及び晴眼留学生の困難については「空間」で有意な差がみられた。視覚障害留学生の困難は「宗教的關係」、「机」、「商品」、「ハラル商品」、「ATM」、「福祉サービス」に関する6件の困難に整理できた。

キー・ワード：視覚障害 留学生 困難 半構造化面接

I. 問題の所在

日本の大学では、障害のある留学生の増加が指摘されている（許・加藤・鈴木, 2012）。このうち、視覚障害留学生は、大学間の交換留学生として来日する例や企業や団体から招待される例があり、後者の場合は、日本語と三療（あん摩マッサージ指圧・鍼・灸）を学ぶ者が多い。

このような視覚障害留学生が、充実した留学生生活を送るためには、学習環境を整備するだけでなく、最低限の生活環境を整備することが必要（江村, 1995）であり、これらの環境整備に伴う支援や支援内容の効果検証を継続して行うことが肝要である（北川・辻野・古澤, 2015）。

北川ら（2015）は先天性の重度視覚障害留学生に学習支援と生活支援を行っており、1) 場所、2) 情報、3) 他者へのアクセシビリティについて支援した内容を報告している。このうち、1) については、一人で安全に移動できるよう歩行指導を行い、日本の交通事情や点字ブロックや音響装置付き信号機について説明を行って

る。2) については、視覚障害留学生は日本社会に関する既存知識も少なく情報を自ら得ることが難しい面があるため、交通機関の時刻表、鉄道の乗り換え、欲しいものがどこで購入可能か、障害者の公的なサービス等について情報提供を行っている。3) については、重度視覚障害者（主として点字を常用する程度の視覚障害者）は知らない人に自ら話しかけることは困難であるため交流の機会を作ったと報告している。

これまで視覚障害留学生の困難さや不便さについて明らかにした研究は散見されるが、報告されているものの中では、視覚障害留学生の日本語学習に関するもので、例えば、視覚障害留学生の日本語教育、支援内容や授業の実践、授業における困難さ、学習環境の現状と課題、日本語能力試験で提供すべき支援内容、読解支援の試み、漢字学習の必要性とその方法等に限られている。

一方、晴眼留学生の日常生活における困難については、例えば、中野（2015）はムスリム留学生の社会生活上での一番の困難として飲食の制限による困難を挙げている。また、趙（2017）は、中国人の留学生を対象に調査を行い、留学

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学人間系

生活で食生活の乱れや栄養が偏ってしまいがちであることを指摘している。その他にも、譚・渡邊・今野(2011)は、日本語の困難、勉強面の困難、経済面の困難について報告している。

先行研究から、日本へ留学している視覚障害留学生在が増加している一方、日常生活でどのような困難を感じ、どのような工夫をして生活しているのかについてはまだ明らかとなっていない。視覚障害留学生在が日常生活で感じている困難を明らかにすることは、これから来日する視覚障害留学生在の生活を支援する上で重要な知見になると考えられる。

II. 研究の目的

本研究では、視覚障害留学生在が日常生活を送る上で感じる困難を明らかにすることを目的とした。

なお、「困難」という用語の辞書的な意味は、「物事をするのが非常に難しいさま」(日本語大辞典, 2002)、「簡単にはなしとげられないこと、実現・実行が難しいこと」(大辞林, 1995)とある。本研究における「困難」は、「日常生活を送る上で、自分1人で人の手を借りずには行うことが難しいこと」とする。

III. 方法

1. 調査参加者

視覚障害留学生在と晴眼留学生在の困難を比較することによって、視覚障害留学生在に特有の困難を明らかにするため、点字を常用する視覚障害留学生在10名と晴眼留学生在10名を対象とした。なお、文化的側面等を踏まえ、晴眼留学生在は視覚障害留学生在の出身国、あるいは隣国の者とした。

2. 調査手続き

20XX年視覚障害留学生在及び晴眼留学生在を対象にインタビュー調査を実施した。調査場所に関しては、参加者と事前に相談し合って、移動しやすいため、話しやすい場所に設定した。

半構造化面接を一人あたり1時間～2時間程度実施し、許可を得てICレコーダーに録音した。

インタビューに先立って、口頭及び文章にて本研究の趣旨及び研究方法、倫理的配慮項目について説明した。調査協力者は同意書への署名を行い、それをもって調査への同意を得たものとした。視覚障害留学生在の8名が全盲や光覚であり、自筆署名が困難であったため代筆をもって同意を得た。2名は筆者が書く欄をガイドすることにより自筆で署名を行った。

3. 調査内容

参加者の特徴を把握するため、先行研究(財団法人共用品推進機構視覚情報障害班, 2000; 中野, 2015)を参考に1)性別、年齢、国籍、2)出身地、母国語、宗教、3)視力、疾患、見えにくく(見えなく)なった年齢、4)母国での身分、職業、5)海外経験の有無、一人暮らしの経験、6)日本での滞在期間、身分、職業、来日目的、7)日本語能力、外国語、他のスキルを尋ねた。

視覚障害留学生在の日常生活における困難を把握するために、北川ら(2015)のアクセシビリティ支援の枠組み(場所・情報・他者)に従い、他の先行研究(財団法人共用品推進機構視覚情報障害班, 2000; 財団法人共用品推進機構, 2010; 永原, 1993)から質問項目を収集・検討し、「空間で感じる困難」、「情報の入手や理解の上で感じる困難」、「コミュニケーションの上で感じる困難」、「質問項目以外に感じている困難」について計18項目の質問項目を作成した(Table 1)。

なお、晴眼留學生のプロフィールに対する質問項目は、「視力」、「疾患」、「見えにくく(見えなく)なった年齢」及び、「障害者支援サービスの情報」に関する質問は行っていない。

4. 分析方法

留學生の録音音声データを逐語データ化及び切片化した。また、切片化した結果、同じ内容が幾つかの質問項目で見られたため、困難の内容を意味内容によってカテゴリ化することとした。さらに類似する最小カテゴリを再カテゴリ化し、大カテゴリとすることとした。困難の大カテゴリ、小カテゴリ、キーワードの妥当性に関して、筆者らと合わせて視覚障害を専門とす

Table 1 プロフィールに関する質問項目

調査項目	調査内容
1. 回答者について	1.1 性別, 年齢, 国籍 1.2 出身地, 母国語, 宗教 1.3 視力, 疾患, 見えにくく(見えなく)なった年齢 1.4 母国での身分, 職業 1.5 海外経験の有無, 一人暮らしの経験 1.6 日本での滞在期間, 身分, 職業, 来日目的 1.7 日本語能力, 外国語, 他のスキル
2. 空間で感じる困難	2.1 飲食店 2.2 駅 2.3 住居 2.4 通路 2.5 店
3. 情報の入手や理解の上で感じる困難	3.1 機器の操作 3.2 障害者支援サービスの情報 3.3 墨字の情報 3.4 初めて行く場所の情報
4. コミュニケーションの上で感じる困難	4.1 コミュニケーション
5. 質問項目以外に感じている困難	5.1 その他

る学生5名の協力を得て検討した。

また、視覚障害留学生及び晴眼留学生の困難内容における差を検討する際には、SPSS Statistics (Version 26.0) の2つの母比率の差の検定を用いた。

さらに、量的に差がないものに関して、質的差を明らかにするため、視覚障害を専門とする学生4名の協力を得て、視覚障害留学生の困難を抽出した。

5. 研究倫理的配慮

本研究は研究倫理委員会の承認(課題番号 30-96)を得て行った。

IV. 結果

1. 視覚障害留学生の概要

視覚障害留学生10名の出身国、良い目の視力、最終留学先、留学目的、日本語能力、宗教に関する表を Table 2 に示した。

出身国に関して、インドネシア、キルギス、スーダン、タイ、台湾、中国、ブラジル、マレーシア、ミャンマー、モンゴルからの視覚障害留学生、計10名の協力を得た。

視力に関して、全盲6名、光覚2名、視力0.02

から0.04の間が2名であった。

最終留学先に関して、大学5名、盲学校3名、視覚障害者援護協会1名、ライトハウス1名であった。

留学目的に関して、「鍼灸あん摩マッサージ資格習得」7名、「日本語学習」4名、「修士号習得」2名、「博士号習得」1名、「視覚障害者用のソフトウェア作成」1名であった。

日本語能力試験の証明書の有無に関して、「1級」1名、「2級」3名、「N5」1名、「なし」5名であった。

宗教に関しては、「イスラム教」3名、「キリスト教」3名、「仏教」1名、「なし」3名であった。

2. 留学生の感じる困難

視覚障害留学生が日常生活を送る上で感じている困難が155件、晴眼留学生が日常生活を送る上で感じている困難が58件抽出された。これらの困難の内容を困難の意味内容によってカテゴリ化した結果、6件の大カテゴリ「異文化」、「移動」、「機器の操作」、「情報」、「日本語」、「空間」に整理できた。

視覚障害留学生から「異文化」に関して、10名中5名が困難を感じており総数は8件であっ

Table 2 視覚障害留学生の概要

概要	内訳	人数
出身国	インドネシア	1
	キルギス	1
	スーダン	1
	タイ	1
	台湾	1
	中国	1
	ブラジル	1
	マレーシア	1
	ミャンマー	1
	モンゴル	1
良い目の視力	全盲	6
	光覚	2
	0.02~0.04	2
最終留学先	大学	5
	盲学校	3
	視覚障害者援護協会	1
	ライトハウス	1
留学目的	鍼灸あん摩マッサージ資格習得	7
	日本語学習	4
	修士号習得	2
	博士号習得	1
	視覚障害者用のソフトウェア作成	1
日本語能力試験	1級	1
	2級	3
	N5	1
	なし	5
宗教	イスラム教	3
	キリスト教	3
	仏教	1
	なし	3

た。「移動」に関して、10名が困難を感じており総数は37件であった。「機器の操作」に関して、10名が困難を感じており総数は29件であった。「情報」に関して、9名が困難を感じており総数は30件であった。「日本語」に関して、8名が困難を感じており総数は17件であった。「空間」に関して、10名が困難を感じており総数は34件であった。

晴眼留学生から「異文化」に関して、10名中9名が困難を感じており総数は15件であった。「移動」に関して、6名が困難を感じており総数は9件であった。「機器の操作」に関して、6名が困難を感じており総数は6件であった。「情報」に関して、5名が困難を感じており総数は

5件であった。「日本語」に関して、9名が困難を感じており総数は21件であった。「空間」に関して、2名が困難を感じており総数は2件であった。

これらの視覚障害留学生及び晴眼留学生が感じている困難の差を明らかにするために、2つの母比率の差の検定を行った結果 (Table 3)、6件の大カテゴリの中で「空間」に関して有意な差 ($p<.01$) が認められた。他の大カテゴリ「異文化」、「移動」、「機器の操作」、「情報」、「日本語」に関しては有意差が認められなかった。

3. 視覚障害留学生の困難について

視覚障害留学生の困難を明らかにするために、視覚障害留学生の困難の内容から、晴眼留

Table 3 視覚障害留学生及び晴眼留学生が日常生活で感じる困難の2つの母比率の差の検定での結果

カテゴリ	度数	困難数	有意確率
異文化	14 (5/9)	23 (8/15)	.141
移動	16 (10/6)	46 (37/9)	.087
機器の操作	16 (10/6)	35 (29/6)	.087
情報	14 (9/5)	35 (30/5)	.141
日本語	17 (8/9)	38 (17/21)	1
空間	12 (10/2)	36 (34/2)	.001*
総計	20 (10/10)	213 (155/58)	

* $p < .01$ 「度数」の場合 () には、視覚障害留学生/晴眼留学生それぞれの人数が示されている。

Table 4 視覚障害留学生の特有の困難

大カテゴリ	小カテゴリ	キーワード	留学生の共通ニーズ	視覚障害留学生のニーズ	件数	
異文化	食事	宗教的関係	バイキングの時、宗教的に食べられない	食材の確認が難しい	1	
		机	机が狭くて	物を探す時に置いてある物が落ちそうになる	1	
	店	商品	お店で商品を探す時	自分がイメージしている商品とお店の人がイメージしている商品が違う	1	
		ハラール商品	専門店以外の店でハラールの食材を	自分で確認することが難しい	1	
	日本語	機器 日本語	ATM	ATMの日本語を	音声案内で聞くと分かりにくい	2
			福祉サービス	福祉サービスの情報を	音声データで聞いても難解な日本語が分からない	1

学生も感じる困難内容を除外し、視覚障害留学生に特有の困難を抽出したところ2件の大カテゴリ、6件の困難に整理できた (Table 4)。

「異文化」に関して視覚障害留学生が感じている特有の困難として4件抽出された。その内「食事」については「バイキングの時、宗教的に食べられない食材の確認が難しい」1件、「机が狭くて、物を探す時に、置いてある物が落ちそうになる」1件であった。また、「店」に関しては、「自分がイメージしている商品とお店の人がイメージしている商品が違う」1件、「ハラールの食材の確認が難しい」1件であった。

「日本語」に関して視覚障害留学生が感じている特有の困難として3件抽出され、その内「機器」については「ATMの音声案内の難解な日本語が困難」2件、「日本語」に関しては「福

祉サービスの情報を音声で聞いて難解な日本語が分からない」1件であった。

V. 考察

先行研究では晴眼留学生が日常生活を送る上で感じる困難に関しての研究 (中野, 2015; 譚ら, 2011) がある一方で、視覚障害留学生が日常生活を送る上で感じる困難に関する研究は少なかった。

本研究では、視覚障害留学生10名から日常生活を送る上で感じる困難について155件、晴眼留学生からは58件の困難内容があげられた。困難内容を意味内容によって分類した結果、視覚障害留学生が日常生活を送る上で「異文化」、「移動」、「機器の操作」、「情報」、「日本語」、「空間」の中で、「空間」に関して、有意差が認め

られた。

日本人の視覚障害者が「空間」の把握において困難を感じる中で(加藤・谷川・飯塚, 2021)、視覚障害留学生が生まれ育ったことで得られる経験もない、不慣れな環境ではさらに困難を感じる事が考えられる(北川ら, 2015)。「空間」の中でもっとも多く困難を感じる場所として「駅」35件、「店」8件、「飲食店」7件、「自宅」3件が挙げられていたが、調査参加者の中で母国では普段電車で移動することがなく、車社会の国から来日した視覚障害留学生もいた。また物理的な困難に関しては、視覚障害留学生の困難として、店の例でみると、「商品の場所が分からない」、「店員を探すことが難しい」等が挙げられた。これらのことは日本国内で行われた財団法人共用品推進機構(2010)の調査結果と同一であった。加藤ら(2021)は、日本人視覚障害者が店で感じる困難について調査を行い、物理的な困難の他に心のバリアについて「商品や店内でスマホをかざすことで何か言われないう心配」という記述もあったと述べている。一方、視覚障害留学生の回答の中では心理的なバリアの困難は挙げられなかった。

視覚障害留学生に特有な困難は6件を抽出することをできた。これら6件について述べる。

「食事」(宗教的關係)に関して、「バイキングの時、宗教的に食べられない食材の確認が難しい」1件の困難が抽出された。先行研究でも、晴眼のムスリムの留学生が社会生活上の困難に関して、飲食の制限による困難を感じていることが指摘されている(中野, 2015)。飲食店の場合、店員にメニューや食材について教えてもらってから注文することが可能だが、バイキングの時は、視覚情報に頼るため、視覚障害のムスリム留学生の方がより困難を感じていると言える。

「食事」(机)に関して、「机が狭くて、物を探す時に、置いてある物が落ちそうになる」1件の困難が抽出された。日本ではすぐ食事ができるよう、机が小さく、設備が整っている店が多く見られる。食事の前後や食事中、必要となる

物がすでに机の上に準備されている店が多々あり、基本的には、おしぼり、箸、スプーン、フォーク、メニューや呼び出しボタンが置いてある。さらに、ソースや醤油、多種類のドレッシング、唐辛子、コショウ等が置いてある店もある。晴眼留学生は机の情報を視覚で捉えるが、来日したばかりの視覚障害留学生には、日本の机に置いてある物、机の広さ、食事の食べ方に適応し、工夫できるようになるまでに時間がかかるだろう。視覚障害があるために、物を探さずことや物を拾うことに困難が生じ、「机が狭い」ことが困難として挙げられたと考えられる。また、日本の文化では食材の数が多くあり、複数のおかずが複数の和食器で出ることがある。視覚障害者は目の前に物を置く時や物の場所を変える時に言葉で教えてもらいたいと思っているが、来日したばかりの視覚障害留学生にとっては、複数のおかずの名前を聞いてすぐ覚えることが難しいと考えられる。

「店」(商品)に関して、「自分がイメージしている商品とお店の人がイメージしている商品が違う」1件の困難が抽出された。視覚障害者は、触覚で情報を得る場面が多い。しかし、店の商品、特に食べ物や材料を触覚で確認することを遠慮する者も少なくない。晴眼者は、パッケージを見て中身のイメージがつくが、視覚障害者は、パッケージを触っても中身を把握することが難しい。触覚で分かりやすく工夫されている一部の商品もあるが、それ以外の物は、店員に聞いて確認し合ってから買うことになるだろう。また、確認するためには、商品についての知識や日本語能力も必要となる。日本は、商品(食べ物)の種類が豊富で母国と異なるところも多くあるだろう。「そもそもどのような商品が置いてあることが分からない」との意見も述べられた。日本の商品のイメージや知識ができるまで、ある程度の滞在経験が必要になる。店員に商品について教えてもらうことが一番良いが、視覚障害留学生の多くは、来日して間もない頃は、商品の確認ができるくらいの日本語レベルを満たしていないだろう。

「店」(ハラール商品)に関して、「ハラールの食材の確認が難しい」1件の困難が抽出された。中野(2015)は、「豚肉及びイスラム教の儀式に則った過程で処理されていない鶏肉及び牛肉を食すことが禁じされている。これらの儀式や作法が厳守された食品をハラールフードと言い、ムスリムは食事の際に、ハラールフードかどうかを確認しなければならない」ことを指摘している。イスラム圏の場合は、母国では当たり前のようにハラール食品が多く置いてあるため、ハラールではない食品について十分知識を持っていない留学生もいるだろう。来日後、商品の原料を日本語で調べることは容易ではないが、晴眼留学生ならば、工夫すれば可能であると思われる。一方、視覚障害留学生は、原料を自分1人で確認すること、また、数多く存在する商品の中で、原料を逐一細かく確認してもらうことも難しいと考えられる。

「機器の操作」(ATM)に関して2名から「ATMの音声案内の難解な日本語が困難」が抽出された。ATMの操作に関して視覚障害者が困難を感じることは視覚障害者不向き調査委員会(2010)からも示されている。視覚障害留学生が「音声案内の難解な日本語」に困難を感じると述べているが、日常生活で普段使わない日本語の言葉を聞いて理解する困難だけでなく、その背景に、音声案内に沿って、操作をしなければならないこともあると考えられる。また、ATMは晴眼留学生が機器の操作で感じる困難として最も多く挙げられた困難であり、自分でできることとして、インターネット上の動画でATMの使用方法を学習したり、英語での表記を見たり、多様な工夫ができるが、視覚障害留学生は、自分でできる工夫としてATMの音声案内ガイドの日本語を学習することしか考えられない。一方、来日したばかりの日本語学習経験が少ない視覚障害留学生には、音声案内ガイドの日本語は難しいと考えられる。

「日本語」(障害者福祉サービス)に関して、「福祉サービスの情報を音声で聞いても難解な日本語が分からない」1件の困難が抽出された。

視覚に障害のある者に対して、聴覚で情報を把握できるように、障害者福祉サービスの手引きを音声化したCDデータもあるが、それを利用しているとの回答はなかった。以上のことから、視覚障害留学生が福祉サービスの情報を音声で聞いても、難解な日本語は理解が難しいことが考えられる。本研究のフェイスシートでも、日本語能力試験証明書の有無に関して晴眼留学生の5割が日本語能力試験認定証明書の1級を有することに対して、視覚障害留学生の5割が日本語能力試験認定証明書を有していないことが明らかになった。

VI. 今後の課題

本研究は、視覚障害留学生が、日常生活を送る上で「異文化」、「移動」、「機器の操作」、「情報」、「日本語」、「空間」において感じている困難についてインタビュー調査を行った。これらから、視覚障害留学生が日常生活で感じる困難の基礎的な知見を得ることができたが、視覚障害留学生が文化の違いによる困難を感じることは焦点を当てることができなかった。

次の段階としては、視覚障害留学生が日常生活を送る上で感じる困難の内容の中から、自国との文化の違いによって感じる困難を取り上げて明らかにする必要がある。

最後に、視覚障害留学生は、来日後、自国との文化の違いにより、困難を軽減する方法ならびに日本語・日本文化を視覚的情報に依存せず、教授する方策を開発することは今後の課題である。

文献

- 江村裕文(1995) 留学生の異文化適応. 法政大学教養部紀要, 92, 181-198.
- 許明子・加藤あさぎ・鈴木秀明(2012) 障害を有する日本語学習者に対する支援の実践報告: 身体障害者および視覚障害者の学習支援を通して. 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 27, 345-352.
- 譚紅艶・渡邊勉・今野裕之(2011) 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望. 日

- 白大学心理学研究, 7, 95-114.
- 加藤宏・谷川ふみえ・飯塚潤 (2021) 視覚障害者の
買い物行動のニーズ: アンケートの自由記述の
テキストマイニング. 筑波技術大学テクノレポ
ート, 28 (2), 22-27.
- 北川幸子・辻野美穂子・古澤純 (2015) 視覚障害を
もつ留学生受け入れの課題—京都外国語大学に
おける授業外支援の取り組み. 国際言語文化学
会, 1, 57-66.
- 松村明 (1995) 大辞林. 三省堂, 三省堂編集所.
- 永原達也 (1993) 朝子さんの一日. 日本児童教育振
興財団.
- 中野祥子 (2015) 在日ムスリム留学生の社会生活上
の困難. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀
要, 39, 137-151.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2002) 日本語大
辞典. 小学館.
- 財団法人共用品推進機構視覚情報障害班 (2000) 弱
視者不向き調査報告書 —見えにくいことによる
不便さとは—. 共用品推進機構.
- 財団法人共用品推進機構 (2010) 視覚障害者不向き
調査成果報告書. 財団法人共用品推進機構.
- 趙小寧 (2017) 異文化滞在者の食生活実態・意識調
査 —北陸大学の中国人留学生を対象に—. 北陸
大学紀要, 42, 1-18.
—— 2021.8.20 受稿、2021.12.2 受理 ——

Everyday Difficulties of International Students with Visual Impairments Studying in Japan

Nozima YULDASHEVA* and Hideyuki KOBAYASHI**

The purpose of this study is to elucidate the difficulties experienced by visually-impaired international students in their daily lives. We conducted a semi-structured interview on the issue of everyday difficulties experienced by 10 visually-impaired international students. Another interview with the same content was also conducted with 10 sighted international students. The difficult situations of these international students were divided into 6 broad categories and 14 subcategories. In addition, through these data significant difference was found between the responses of the international students with visual impairments and sighted ones in the categories “space”. Finally, there were 6 situations characteristically difficult for international students with visual impairments related to “religious reasons”, “dining table”, “goods”, “halal food”, “ATM” and “welfare service”.

Key words: visual impairments, international students, difficulties, semi-structured interview

* Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba